様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月２１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19730397
研究課題名（和文）　部活動における競技種目の特性により規定される満足感についての研究

研究課題名（英文）　A study on members' satisfaction regulated by characteristics of athletic club activities

研究代表者
吉村　斉（YOSHIMURA HITOSHI）
高知学園短期大学・幼児保育学科・准教授
研究者番号：20310899

研究成果の概要（和文）：本研究は、競技種目の特性によって、対人関係やリーダーシップの重要性が異なるか否かを検討したものである。まず、中学運動部員を対象に質問紙法によって検討すると、団体種目では、主将が指導に積極的で厳格な場合、部員たちは部の雰囲気に満足していた。また、面接調査も行うと、団体種目の部員は、部の対人関係がまとまり，部活動に満足していた。以上のことから、団体種目では、対人関係がまとまるよう方向づけることが、重要な要因であることが示唆された。
研究成果の概要（英文）：The present study examined whether the characteristics of club activities affects the importance of club members' interpersonal relations and captains' leadership. First, participants, 508 athletic club members, completed a questionnaire around the period of superiors' retirement. The following significant results were obtained: When diligent captains in team sports clubs were authoritarian, members were more satisfied with the atmosphere in their clubs than when the diligent captains were non-authoritarian. Second, 5 club members were completed an interview method. Since interpersonal relations cohesive in team sports clubs, the members were satisfied with club activities. We conclude that the cohesiveness in the team sports clubs had a great influence on members' satisfaction to club activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	500,000	0	500,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：集団・リーダーシップ

１．研究開始当初の背景

青年期は，特定の友人とのつきあいを優先しやすい時期である。しかし，その傾向（以下，小集団閉鎖性）があまりに強い場合，部のまとまりに支障を来すことも危惧される。それを防ぐためには，主将のリーダーシップ

が重要な意味をもつ。特に，団体種目では，部の連帯感が強くなることによって，満足感がより高められると思われる。

２．研究の目的

本研究では，運動部員の部活動への満足感を規定する要因として競技種目の特性を検討することが主たる目的である。具体的には，競技特性として人間関係の展開に注目し，それを生み出す要因と思われる主将のリーダーシップと部員の特性との関係の違いを解明することを目的とする。また，調査結果が現実場面で見られるのかを探索的に確認するため，部員への面接調査も実施する。調査の時期について，部が発足した時期と現チームの活動が終了する時期では，これらの関係が異なることも推察される。本研究では，活動の成果を吟味するため，最上級生の引退が間近で現主将による活動が終了しようとする時期(以下,チーム終結期)を対象とする。

なお，本研究の検討に入る前に，探索的に部活動の個人活動と団体活動（運動系と文化系を含む）による対人関係の違いも確認する。ここでは，高校生を対象に，小集団閉鎖性と部の凝集性や魅力との関係が活動の特性に応じて異なるか否かを検討する。

３．研究の方法

(1)高校生を対象とした質問紙による調査

①調査対象者：公立高等学校１年生部活動加入者 100 名であった（男子 58 名，女子 42 名)。

②調査の内容：本研究では，小集団閉鎖性尺度，部の集団凝集性に関する尺度，部の集団魅力に関する尺度が用いられた。

③調査の実施：2007 年 11 月，ホームルームの時間を利用して，担任教師による無記名の集団調査が行われた。

(2)中学生を対象とした質問紙法による調査

①調査対象者：中学運動部員２年生で，主将を務めていない 508 名（男子 310 名，女子 198 名）を対象とした。

②調査の内容：本調査では，対人関係に関する尺度，部の連帯性尺度，主将のリーダーシップ尺度，部活動への適応感尺度を用いた。回答はすべて６件法で回答させた。

③調査の実施：調査協力校では，ほとんどの運動部の３年生最後の大会が６月中旬から７月にかけて実施されていた。そこで，６月をチーム終結期と位置づけ,2008年6月上旬,無記名回答の質問紙法による集団調査が行われた。

(3)中学生を対象とした面接による調査

①面接協力者:中学運動部員２年生５名(個人種目２名,団体種目３名)に面接を行った。主将は含まれていなかった。

②質問内容：面接では，主将の指導，部の人間関係，自己表現，部活動への関心に関する質問を提示し，自由に話してもらった。

③調査の実施：2009 年３月上旬，半構造化面接を行った。面接はすべて筆者が行った。１人あたりの平均所要時間は約 15 分であった。

４．研究成果

(1)高校生を対象とした個人活動と団体活動による集団のまとまりの違いに関する探索的検討

部の集団凝集性および部の集団魅力各尺度得点を従属変数として，活動特性（2）×性別（2）×小集団閉鎖性（2）の三要因分散分析(多重比較は Tukey の HSD 法)を行った。

①部の集団凝集性：分散分析の結果，活動特性の主効果（F（1, 92）=4.33, p<.05，団体活動>個人活動，MSe=.30）が認められた。さらに，小集団閉鎖性と性別の交互作用も有意であった（F（1, 92）=8.00, p<.01, Figure 1)。単純主効果の検定を行うと，男子において，小集団閉鎖性 H 群の集団凝集性得点が L 群の得点より有意に高かった(F(1, 92)=8.32, p<.01)。女子では小集団閉鎖性の群間に有意差は認められなかった（F（1, 92）=1.65, $n.s.$)。

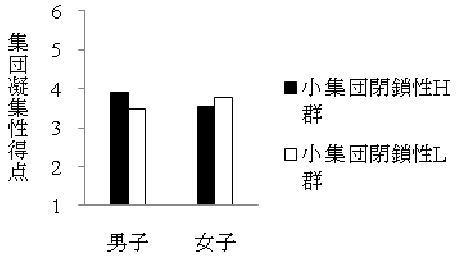

Figure 1　集団凝集性における小集団閉鎖性と性別の関係

②部の集団魅力：分散分析の結果，性別の主効果が有意であった（F（1, 92）=3.95, p<.05，女子>男子，MSe=.14)。

本研究では，活動特性によって，部の集団凝集性が異なっていた。団体活動であれば，他者とのかかわりが必然的に生じることから，「われわれ意識」を体感し，部のまとまりも出てくることは当然予想された結果といえる。部の集団魅力では，活動特性の違いが見られなかったことから，活動の特性と部活集団への満足はあまり関係がないのだろうか。ただし，集団の構成員には先輩も含まれている。対象の高校１年生が後輩をもった時に集団魅力に変化が生じるか否かも確認する必要がある。異なる時期に調査を行うことが今後の課題である。

また，集団凝集性と小集団閉鎖性の関係は，

男女間で異なることが示唆された。女子では小集団閉鎖性の違いが見られなかった。女子は，特定の同性友人とのつきあいを優先しやすいという（榎本，2003）。そのため，男子に比べて集団全体への意識が薄く，違いが見られなかったことも考えられる。ただし，運動系を対象にした吉村（2005）では，小集団閉鎖性と部活動への適応感の関係に性差は見られなかった。他者とのかかわり方とは別の活動特性が影響していることも推察される。活動特性をより具体化した検討や尺度の工夫も今後の課題である。

(2)中学生の部活動への適応感における部の連帯性と主将のリーダーシップの関係

適応感尺度の4因子の尺度得点を従属変数として，リーダーシップ(3)×連帯性(2)×性別(2)の三要因分散分析（多重比較は Tukey の HSD 法）を行った。

①部活動への積極的行動：分散分析の結果，リーダーシップ，連帯性，性別の主効果が認められた（F（2, 435）=10.38, p<.001; F（1, 435）=36.43 p<.001; F(1, 435)=8.96, p<.001, MSe=.74)。多重比較の結果，リーダーシップについては，圧力 H-積極的指導群と圧力 L-積極的指導群が圧力 H-消極的指導群より有意に高かった。また，連帯性については，連帯性 H 群が連帯性 L 群より有意に高かった。さらに，性別については，男子が女子より有意に高かった。

②主将への満足感：分散分析の結果，リーダーシップと連帯性の主効果（F（2, 435）=35.41, p<.001, MSe=.74, 圧力 H-積極的指導群・圧力 L-積極的指導群>圧力 H-消極的指導群; F（1, 435）=13.56, p<.001, 連帯性 H 群>連帯性 L 群），およびリーダーシップと性別の交互作用が有意であった（F（2, 435）=4.35, p<.05, 男子: 圧力 H-積極・圧力 L-積極>圧力 H-消極; 女子: 圧力 H-積極>圧力 L-積極>圧力 H-消極, Figure 2)。

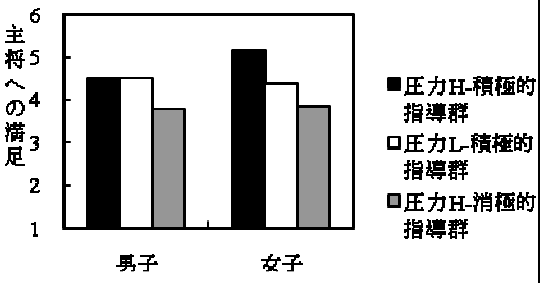

Figure 2　主将の満足におけるリーダーシップと性別の関係

③部の雰囲気への満足感：分散分析の結果，連帯性の主効果（F(1, 435)=106.93, p<.001, MSe=.68, H 群>L 群），およびリーダーシップと連帯性の交互作用が有意であった（F（2, 435）=4.45, p<.05, 連帯性 H 群：F（2, 435）=3.66, 圧力 H-積極>圧力 H-消極; 連帯性 L 群：F（2, 435）=2.37, 圧力 L-積極>圧力 H-積極, Figure 3)。

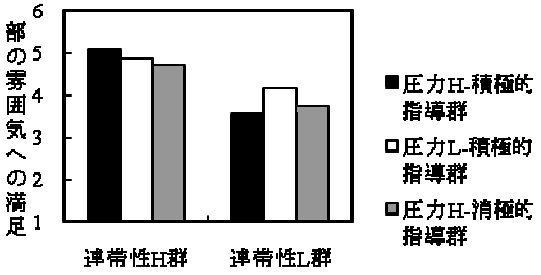

Figure 3　部の雰囲気への満足における連帯性とリーダーシップの関係

④部への所属感：分散分析の結果，リーダーシップと連帯性の主効果が認められた（F（2, 435）=6.46, p<.01, MSe=.96, 圧力 H-積極>圧力 H-消極; F(1, 435)=40.91, p<.001, 連帯性 H 群>連帯性 L 群)。

本研究で特筆すべき結果は，チーム終結期の部の雰囲気への満足感において，連帯性とリーダーシップの交互作用が有意であった点である。連帯性が強い部の雰囲気への満足感が高いことは当然である。さらに積極的かつ厳格な指導の下で（圧力 H-積極的指導群）その効果が高まるのだろう。逆に，連帯性の弱い部では，圧力 H-積極的指導群の満足感がもっとも低いことから，主将の圧力が効果的に作用するためには，部の連帯性を基本としていることが示唆される。

(3)中学の部活動への適応感における競技特性と連帯性の関係

部活動への適応感尺度 3 因子の尺度得点を従属変数として競技特性（2）×連帯性（2）×性別（2）の三要因分散分析（Tukey の HSD 法）を行った。

①部活動への積極的行動：分散分析の結果，競技特性と連帯性の両主効果が認められた（F（1, 507）=7.66, p<.01, 団体種目>個人種目; F（1, 507）=72.90, p<.001, 連帯性 H 群>L 群, MSe=.95)。

②部の雰囲気への満足：分散分析の結果，競技特性と連帯性の両主効果が認められた（F（1, 507）=6.71, p<.01, 個人>団体; F（1, 507）=181.79, p<.001, 連帯性 H 群>L 群, MSe=.75)。また，競技特性と連帯性の交

互作用も認められ（F(1, 507) =4.25, p<.05, Figure 4），連帯性 L 群では個人種目が団体種目より高かった（F(1, 507) =8.01, p<.01）。

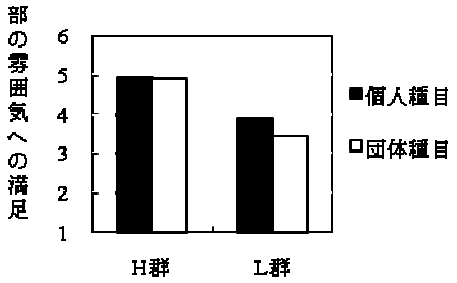

Figure 4　部の雰囲気への満足における競技特性と連帯性の関係

③部への所属感：分散分析の結果，連帯性の主効果が認められた（F (1, 507) =75.56, p<.001，連帯性 H 群>L 群，MSe=1.21）。

本研究では，部の連帯性が弱いと捉えた部員の部の雰囲気への満足得点において，団体種目が低かった。Carron（1980）によると，集団のまとまりによって課題遂行が向上するのは団体を基盤とした種目に該当することが示唆されている。それゆえ，連帯性の弱いことと部員同士の仲間関係への満足が低いことは相互依存の関係であり，当然予想された結果といえる。特に，団体種目では，競技活動そのものへの影響が強いことから，部活動そのものへの魅力を低下させ，活動の継続に支障を来す恐れがある。継続か退部かも指標に入れた分析が今後の課題である。

(4) 中学の部活動への適応感における対人関係と主将のリーダーシップの関係，および競技特性による違い

まず，各部員が所属する部を個人種目と団体種目に分類した。分類にあたっては，吉村（2010）の分類に準拠した。判断ができない場合は吉村（2010）の基準を用いて，筆者が分類した。その上で，部活動への積極的行動，主将への満足感，部の雰囲気への満足感，部への所属感各尺度得点を従属変数とした競技特性（2）×対人スキル（3）×主将のリーダーシップ（3）の三要因分散分析を行った。

①部活動への積極的行動：分散分析の結果，競技特性，対人スキル，リーダーシップの主効果（F (1, 429) =5.06, p<.05，打に他種目>個人種目；F (2, 429) =11.53, p<.001，自己表現型・利己-閉鎖型>小集団閉鎖型；F (2, 429) =49.51, p<.001，圧力 H-積極>圧力 L-積極>圧力 H-消極），および対人スキルとリーダーシップの交互作用（F (4, 429) =2.51, p<.05, Figure 5）が認められた（MSe=.74）。対人スキル各類型におけるリーダーシップの差も検討すると，自己表現型および利己－閉鎖型では圧力 H-積極的指導群と圧力 L-積極的指導群が圧力 H-消極的指導群より（自己表現型：F (2, 429) =20.37；利己－閉鎖型：F (2, 429) =10.44），小集団閉鎖型では圧力 H-積極的指導群が圧力 L-積極的指導群と圧力 H-消極的指導群より（F (2, 429) =22.39），それぞれ有意に高かった。

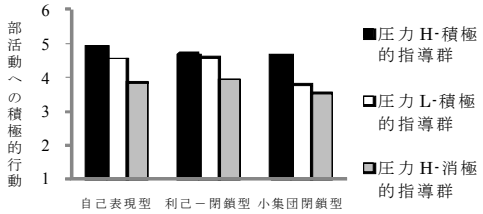

Figure 5　部活動への積極的行動における対人スキルとリーダーシップの関係

②主将への満足：分散分析の結果，リーダーシップの主効果が認められた（F (2, 428) =3.65, p<.001，圧力 H-積極>圧力 L-積極>圧力 H-消極，MSe=.79）。

③部の雰囲気への満足：分散分析の結果，リーダーシップの主効果が認められた（F(2, 429) =34.49, p<.001，圧力 H-積極・圧力 L-積極>圧力 H-消極，MSe=.84）。また，競技特性とリーダーシップの交互作用も認められた（F (2, 429) =3.70, p<.05, Figure 6）。単純主効果の検定を行うために，競技特性別にリーダーシップ各群の差も検討すると，個人種目では圧力 H-積極的指導群と圧力 L-積極的指導群が圧力 H-消極的指導群より有意に高かった（F (2, 429) =17.83）。一方，団体種目では圧力 H-積極的指導群が圧力 L-積極的指導群と圧力 H-消極的指導群より有意に高かった（F (2, 429) =20.80）。

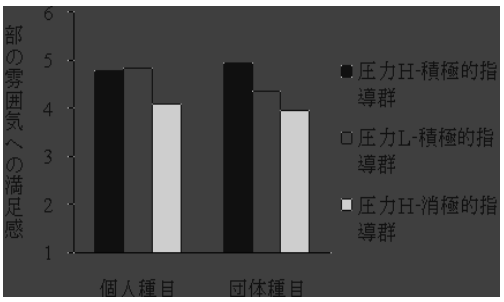

Figure 6　部の雰囲気への満足における競技特性とリーダーシップの関係

④部への所属感：分散分析の結果，対人ス

キルとリーダーシップの両主効果が認められた（F（2, 429）=3.86, p<.05, 自己表現型>小集団閉鎖型; F(2, 429)=41.36, p<.001, 圧力 H-積極>圧力 L-積極>圧力 H-消極, MSe=1.05)。

本研究では，小集団閉鎖性型の部活動への積極的行動が，圧力L-積極的指導群よりも圧力H-積極的指導群の下で高かった。このことは，部員同士の対人関係の分裂を防ぐ上で，主将の積極的かつ厳格な指導が求められることを示唆するものと思われる。ただし，個人種目と団体種目の間に差はなかった。

他方，部の雰囲気への満足感においては圧力 H-積極的指導群が圧力 L-積極的指導群より高かった。つまり，主将の積極的かつ厳格な指導によって部員同士の対人関係がまとまり，その結果部の雰囲気に対しても高く満足するようになることが示唆された。ただし，この関係が対人スキルの類型によって異なることは見られなかった。このことは，新人戦終了後に調査が行われた吉村（2010）と異なるものである。最上級生の引退が間近な時期では，部の方向性も定められているだろう。部員の個人特性による影響は，チームが発足して間もない時期の方が大きいことが考えられる。いいかえると，新チーム結成後間もない時期に，主将が積極的かつ厳格なリーダーシップをとり，部全体に浸透させることが，後の活動の活性化を図る上で重要な課題になるといえる。

(5)面接法を用いた中学の部活動への適応感と競技特性との関係についての検討

①個人種目　女子部員 A の回答によると，主将の圧力が強い様子は見られず，部のまとまりも物足りないことが示唆された。A 自身も自分がいいすぎたり，部員全体の話し合いで決定したりすることに不満を表わす部員がいたことを語っていた。ただし，部活動への関心は高く，特に部員全体で活動する時にその傾向が強いことが特徴である。

次に男子部員Bの回答によると，主将の圧力が強い様子は見られず，部員自身に利己的，積極的な自己表現は見られなかった。それでも，同学年の少数の仲間とのつきあいを楽しみ，部活動に高い関心を示していることが特徴である。

②団体種目　男子部員 C の回答によると，主将は全体に対して厳格な態度で臨み，部もまとまっていることが示唆された。利己的，積極的な自己表現は見られず，関心は高いと思われることが特徴である。

次に，女子部員Dの回答によると，主将の圧力は必要時に発揮され，彼女自身の自己表現も利己的表現を抑制しようとしていることが示唆された。部がまとまっている中で，部員全体の集まりに楽しさを感じ，関心も高いと思われることが特徴である。

続いて，男子部員Eの回答によると，主将は必要に応じてきちんと注意しており，その雰囲気の中で積極的に取り組んでいることが示唆された。E 自身も部員全体とコミュニケーションをとりやすいと感じ，利己的表現の抑制が表れていた。特に，チームのまとまりに魅力を感じていることが特徴である。

本研究では，運動部員の適応感における対人スキルと主将のリーダーシップの関係が，競技特性に応じて異なることを確認するため，面接法による研究が行われた。以下では，回答内容と(4)の結果を比較しながら，探索的に(4)で得られた知見の確認を行う。

本調査で，競技特性による違いが推察されたのは，部の人間関係の様相であったと思われる。まず，A と B の回答より，部がまとまっていなかったり，特定の友達とのつきあいを楽しんだりしている状況であっても，部活動への関心は高いことが示唆された。主将の圧力も強い印象は抱いていなかった。つまり，個人種目では，部のまとまりはあまり重要ではなく，個人の成長欲求を満たす活動が行われていれば，部活動に満足して取り組んでいることが推察される。

一方，団体種目では，主将の圧力を感じる雰囲気の中で活動が展開されている様子が見られた。C, D, E は，部の人間関係が良好であると捉え，また利己的表現を抑制していることも推察された。部活動への関心も高い様子であった。ただし，C と E の「けんかがあった時の対処」に関する発言では，周囲に合わせることで適応しようとしている様子も示唆された。仲間外れを避けるために同調しているとすれば，彼らの小集団閉鎖性は強いことも考えられる。その場合，自ら連帯性を強くする行動をとることは難しいだろう。主将の指導など外的要因を通して，彼らは部のまとまりを感じていると推察される。特にEは「今の部に入っていることをどう思うか」に関する質問に対して，部のまとまりが適応感を高めていることを明確に発言していた。これらは，部がまとまるためには，主将の積極的かつ圧力に関する指導と，部員の利己的表現と小集団閉鎖性の抑制が求められることを支持する回答であったと思われる。

以上のことから，部の人間関係のまとまりが部活動への関心と関連していることは，団体種目において示唆された。そこには，主将の積極的指導と圧力によるリーダーシップ，利己的表現の抑制や小集団間の連携が影響していることも推察された。この結果は，吉村（2010）の知見と概ね一致するものと思われ，知見の妥当性を支持する回答であったと考えられる。いいかえると，チーム終結期を対象とした(4)とは異なる面もあった。このことは，チーム内の対人関係の様相が流動的

であり，固定的に捉えることができないことを示唆するものといえる。

なお，A は「先輩と後輩や仲のいい友だちとの関係」に関する質問において，全員で一緒に練習する時に楽しみを感じると発言していた。個人種目の選手は孤独感を抱きやすいことから（Cratty, 1973），部員全体のかかわりを潜在的に求めていることも考えられる。競技の特性上，部員全体のかかわりを経験する機会が少ないために，啓発的経験も限られたレベルで停滞するとすれば，多くの部員同士がお互いの違いを自覚し，自己理解を深めるスキルを身につけることが，個人種目の活動の活性化においても重要な課題になるだろう。

(6)全体のまとめ

以上のことから，部活動の活性化のためには部員同士の対人関係のまとまりが求められること，そのためには部員側には小集団内の友人だけでなく全部員と相互理解しあえる自己表現が求められること，また主将側には技術指導と人間関係調整に積極的で部の決まりを守らせる上で厳格な態度が求められることが示唆された。つまり，各部員が利己的表現を抑制して積極的に自分の考えを相手に主張するスキルが求められることが確認されたといえる。そのスキルを通して，主将の積極的かつ厳格な指導も肯定的に受け止め，部のまとまりが強化されるものと思われる。とりわけ，部のまとまりが団体種目で重要になることが示唆されたことが，本研究の特筆すべき成果である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

吉村　斉　部活集団への満足と部の活動の特性との関係　日本社会心理学会第 49 回大会　2008 年 11 月 2 日　かごしま県民交流センター

吉村　斉　部活動への積極性・満足感を規定する連帯性と競技特性の関係　日本心理学会第 73 回大会　2009 年 8 月 27 日　立命館大学

吉村　斉　部活動への積極性・満足感を規定する連帯性と主将のリーダーシップの関係　日本教育心理学会第 51 回総会　2009 年 9 月 20 日　静岡大学

６．研究組織

(1)研究代表者

吉村　斉　（YOSHIMURA HITOSHI）

高知学園短期大学・幼児保育学科・准教授

研究者番号：20310899

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：